

Dāna

ダーナ/第43号
発行日/令和8年1月25日
発行人/廣瀬卓爾
編集・発行/浄土宗平和協会

VOL.
43

「ダーナ」とは
サンスクリット語で「布施」の意

浄土宗平和協会のホームページは、
こちらから。



浄土宗平和協会令和6年度 ブックギフト

令和6年度のブックギフトは、東京・名古屋・京都の3会場で開催しました。



東京会場

本協会が実施している支援事業の一つブックギフトとは、日本に在住する私費留学生に対して、個々の学生の専攻に合わせた専門書籍を贈呈している事業である。

令和6年のブック・ギフトでは、小論文審査を通過した18名が受賞となった。

各会場は、東京会場（大本山増上寺）・名古屋会場（尾張教区 願王寺）・京都会場（大本山

百万遍知恩寺）の3会場で行われ、お引き受けいただいた各寺院お上人により勤行・法要が行われ、授賞式にて希望書籍が手渡された。

京都会場では、福原台下から受賞者に直接希望図書を手渡しされ、お言葉をいただいた。このネット社会で現地に行かなくても見れる時代、現地で体験することが大切であると言われ「留学は遊学といい勉強とともにその国を体感することが大切であり日本で勉強と体験をたくさんしてください」とお言葉をかけられ、受賞者との時間を過ごされた。

本年も各会場それぞれ工夫を凝らした時間ももたれた。各会場皆様のご協力により開催できましたことを感謝する次第である。

令和7年度のブックギフトでは宮城・東京・名古屋・京都・福岡で開催予定である。



京都会場



名古屋会場



INDEX

ブックギフト開催報告 / 「平和誓願の集い」九州大会開催報告 / FEATURE ダーナ鼎談 / COMPETITION 第7回平和作文コンクール / COLUMN 北海道第二教区大成寺 藤井敬亮師、京都教区檀王法林寺 信ヶ原雅文師 / 令和6年度平和念仏募金献金者名簿 令和6年度会費納入者ご芳名 / INFORMATION コラム兵戈無用、編集後記ほか

第二次世界大戦終戦80年戦没者追悼・平和誓願法要 浄土宗平和協会「平和誓願の集い」

《第4回九州地区大会開催》

令和7年度の「浄土宗平和誓願の集い」並びに浄土宗平和協会総会は、第二次世界大戦終戦から80年の年であることから、九州地区の三州教区及び沖縄組のご協力を得て、摩文仁の丘平和祈念公園の平和祈念堂、平和祈念資料館を会場に開催した。

浄土宗平和協会の総会は、浄土宗開宗850年の記念事業として「浄土宗平和誓願の集い」がスタートした令和3年度より、同記念事業に先立って開催しており、当日全ての案件が承認された。

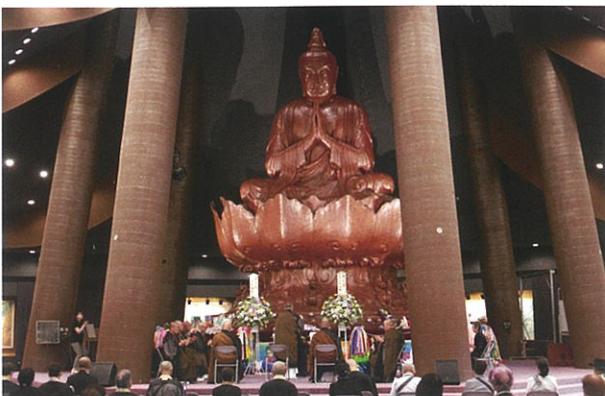
この度の「浄土宗平和誓願の集い」は、浄土宗と共催のもとに開催し、第二次世界大戦戦没者追悼と併せて平和誓願法要を厳修した。浄土宗企画調整室長の名越邦博上人御導師のもと、脇導師には三州教区教区長多賀学昭上人及び三州教区教化団長田村智彰上人にお勤めいただき、また式衆には教区内教師、沖縄組寺院にご出勤賜り、戦没者に追悼の誠を捧げ、世界平和を希求した。

続いて、戦時資料収集におけるパネルデータを廣瀬卓爾理事長が解説し、34ヶ寺155点の提供資料のうち、供出調査のために穴があげられた梵鐘や、白いタスキをかけられて供出される阿弥陀如来像、戦犯の方が施設内で手作りされた鑿子と位牌等々の説明を当時の現況に想いを馳せて語り、参加者は真剣な眼差しで聴聞した。

続いて、2024年にノーベル平和賞を受賞された日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の事務局次長の和田征子先生に、「核兵器のない世界へ向かって～世界へ届けたい被爆者の声～」と題した記念講演を拝聴した。和田先生が幼い日にお母さまから聞かれた原爆被害の惨状についてのお話や、ご自身の被団協活動の様子を諄々と話されたが、聴衆は一様に戦争の悲惨さ、とりわけ原爆の恐ろしさを痛感した。

今を生きる我々浄土宗教師は、戦時下での本宗の動向を知り、如何に戦争に向き合ったのか、厳しくともその事実を受け止め懺悔し、世界平和への着実な活動に取り組まなければならない。

法然上人求道のきっかけとなった父漆間時国公のご遺言、「敵人を恨むことなかれ。これ、ひとえに先世の宿業なり。もし、遺恨を結ばば、その仇世々に尽き難かるべし。」の最後の言葉を常に心にとどめて、万民救済の念仏信仰に邁進することを誓う。



平和祈念堂で開催された「浄土宗平和誓願の集い」



和田征子先生の講演

掲げ続けたい「平和」への思い —2人の実践者から学ぶこと—

多様化し、混迷する現代社会。われわれ宗教者は「世界平和の実現」という重い課題を前に、どのような貢献が可能なのでしょう。DANA（ダーナ）43号の巻頭鼎談では、この問いかけに確かなヒントを得るべく、長期にわたって「実践」を続けてきた二人をゲストとしてお迎えしました。「戦後80年」を迎えての思いに始まり、政治の世界と距離を置いて平和活動に携わる難しさ、宗教者が保つべき価値観などについて、率直かつ大胆な提言が寄せられました。これらは、「戦争を知らない」若い世代にとっても、貴重な伝言となるに違いありません。



（左から）戸松義晴理事長、福家俊彦長史、廣瀬卓爾理事長

戦後間もなく始めた「平和活動」

——浄土宗平和協会理事長の廣瀬卓爾です。今日お招きしたのは天台寺門宗総本山・園城寺（三井寺）のトップである長史（ちょうり）を務められる福家俊彦（ふけ・しゅんげん）師と、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会理事長の戸松義晴（とまつ・ぎせい）師です。福家長史は日本を代表する古刹の運営にあたる一方で、先々代の

長史でご実父・俊明（しゅんみょう）師以来のさまざまな平和活動を引き継いでおられます。また、戸松師は世界の諸宗教が初めて手を携えた組織を、苦勞を重ねてリードされてこられた。お二方にいま、世界平和の実現のため宗教者が果たすべき役割とはどのようなものであるとお考えになっておられるかをうかがいたく存じます。まずは、令和7（2025）

年は先の戦争が終わって80年という年でしたが、「戦後80年を迎えた思い」をお聞かせください。

福家俊彦長吏 「このような場にお招きいただき、本当に光栄です。廣瀬理事長とは同じ滋賀県大津市に住んでいて、ふだんからお付き合いもあるのですが、私どもの地味な活動をそのように評価してもらって、恥ずかしいような気持ちです。ご質問の戦後80年への思いですが、戦争とか平和とかに論及する以前に心配なのは、人間全体の持つ価値観が狭まっている、もっといえば貧しくなっているように思えてならないことです。世の中全体が経済性や合理性ばかりに走り、人間を見るときも例えばその人の社会的地位であるとか、年収であるとか計量化、数値化できるものでしか判断できなくなっている。こうしたことがいま、ウクライナや中東ガザで起きていることにもつながっているのではないのでしょうか。価値観にこだわる宗教者としては非常にまずいと思っています、この80年をもって改めて、日本人の価値観全体を見直す機会にしてほしいと思います」

戸松義晴理事長 「80年というのは、本当に長い時間です。戦争をくぐり抜け、実際に悲惨な目に遭われた方々も、多くが亡くなっておられます。このようなこともあって、戦争についての関心や意識も薄くなってしまった気がします。この結果として遠くない将来、かつてと同じ道をたどってしまうのではないかと心配しています」

——「80年の節目」ばかりが強調されていますが、私はむしろ園城寺さんが毎年、原爆慰霊法要などの活動を地道に続けておられることに敬意を抱いています。いまや、大津市民にとって園城寺さんは「平和を心から願う人々が集うお寺」とさえ受け止められているように思いますが、こうした平和活動が始められたきっかけは何だったのでしょうか。

福家長吏 「第1回は昭和28(1953)年でした。私の父・俊明は大正11(1922)年の生まれで、学徒動員された世代です。幸い病気になったので外地には行かず、生き延びたのですが、のちに園城寺の長吏を継いでからも「再び戦争の時代に戻してはならない」と常々、言っていました。滋賀県での原水爆禁止の運動をリードし、28年8月6日、原爆被災者らの慰霊法要を自分の寺で始めたのです。さらに、沖縄での戦闘が終結した6月23日にも法要を営むようになりました。これらは現在でも続けて



福家俊彦 (ふけ・しゅんげん)

天台寺門宗総本山・園城寺(三井寺)長吏。1959年、滋賀県大津市生まれ。立命館大学大学院文学研究科(西洋哲学専攻)修士課程を修了し、2020年から現職。滋賀県仏教会会長や認定NPO法人びわ湖トラスト理事長もつとめる。著書に『三井の山風どこ吹く風』『三井寺の建築案内』、仏教学者・末木文美士氏らとの共著『見えるものと見えざるもの』などがある。



共著：『見えるものと見えざるもの』『別日本でいい。』

いるほか、原水禁の運動も支援し続け毎年、平和行進の参加者が園城寺を訪ねて来ています」

——昭和28年だと、お寺が平和活動に関わることに対し、周囲の目はかなり厳しかったのではないですか。

福家長吏 「私は昭和34(1959)年生まれなので、当時のことははっきり分かりませんが、父はずっと左翼だと見られていましたね。警察の公安担当にマークされる時代もあったと聞いていますし、難しい状況が続いたと思います。しかし、父たちの行動を強く支えてくれた人たちもいたのです。園城寺の観音堂(西国三十三所観音霊場第14番札所)に集まる婦人たちです。女性として、再び夫やわが子を戦場に送ってはならないという強い思いがあったのでしょうかね

FEATURE

——そんな俊明師も平成21（2009）年、87歳で亡く
なられました。そのあとも、長吏が活動を続けられたのは、
どのようなお考えからでしょうか。

福家長吏 「父のあと、叔父が長吏を継承したの
ですが、叔父も戦争体験者だったので活動を続けました
ね。私の代になっても、それはまったく変わりません。
また、あまり知られてはいませんが、園城寺は明
治維新後に広大な境内地を失い、日露戦争（1904
～05）が終わるとロシア人の捕虜を千人近くも収容
した時期があります。また先の大戦後は境内の北辺に
進駐軍がキャンプを設け駐留するなど、直接的間接的
にも戦争の余波を大きく受けています。法要を続けて
いるのには、二度とそのような時代を迎えてはならな
いという思いがあるのです」

「WCRP」の活動と、その成果

——戸松理事長は浄土宗の僧侶で、私ども平和協会の
仲間でもあります。ハーバード大学大学院で神学を学ばれ、
死生学やターミナルケアの分野でご活躍ですが、世界宗教
者平和会議（WCRP）の活動にも長くかかわっておられます。
まず WCRP とその活動について、簡単にご紹介ください。

戸松理事長 「WCRPは一言で言うと、諸宗教間の対
話と相互理解を通じて世界平和の確立及び文化の向上
をめざす国際 NGO（非政府組織）です。日本の仏教界
や神道、キリスト教などでつくる『日本宗教連盟』の国
際委員会が母体になり1970年に39カ国の宗教団
体が参加して、京都で第1回の世界宗教者平和会議を開
催できました。その成果を結実・継続させるため2年後
の72年、WCRP 日本委員会が結成されたのです。その
後、5年に1回、世界大会を催しているほか、多くの
特別チーム（タスクフォース）が組織されています。も
っとも、WCRP という名称ですが、国際的には『RfP
（Religions for Peace）』が定着していて、将来は日
本もそうなるでしょう。

——70年代という時代から考えると、WCRP（RfP）が
できた背景には東西冷戦の激化と核使用の危機、という世
界情勢が大きかったのでしょうか。



戸松義晴（とまつ・ぎせい）

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委
員会理事長。1953年、東京都生まれ。
慶応大学、大正大大学院を経てハーバ
ード大学大学院で神学修士号を取得。浄
土宗総合研究所副所長もつとめる。編著書
に『寄り添いの死生学』『仏教徒ターミナ
ルケア』など。自坊は、東京都港区にある
浄土宗心光院。



編著書：『寄り添いの死生学』

戸松理事長 「おっしゃる通りです。昭和29（1954）
年3月、米国が北太平洋のビキニ環礁で行った水爆実
験で日本のマグロ漁船『第五福竜丸』が被ばく、無線
長の久保山愛吉さんが亡くなる事件が起き、世界じゅう
で核兵器を無くそうという気運が盛り上がりました。だ
から、WCRP の活動の一丁目一番地は核廃絶なのです。
この目標だけは、すべての加盟団体で一致しています」

——それから半世紀以上が経ちました。WCRP の喫緊
の課題とは何でしょうか。

戸松理事長 「現在世界各地で起こっている実際の紛
争、戦争を止めることですね。特にロシアがウクライナ
に攻め込んだ2022年2月以降、われわれは何とかし
なければと両国を中心とした宗教団体の代表者を、話し
合いのテーブルにつけるべく努力を始めました。その結
果、「紛争地と距離のあるトウキョウでの開催なら」とロシ
アもウクライナも応じてくれ22年9月、『東京平和円卓

会議』として開催することができました。最初は双方とも、目を合すことすらなかったけれど、私どもは続けることにしました。2回目はイスラエルとパレスチナの宗教者も集まり、3度目はミャンマー内戦の関係者が参加してくれました」

——しかし、解決への道は容易ではないでしょう。政治との関係もありますし。

戸松理事長 「その通りです。彼らは宗教者（ロシア正教会、ウクライナ正教会など）といっても、ロシアならプーチン大統領の、ウクライナならゼレンスキー大統領の許可をもらって来日している人物なわけです。ロシア代表の発言を聞いてみると、まるでプーチン氏がそこにいるかのような思いでした。でも回を重ねるうちに、双方議論のテーブルにはつくようになった。怒りで机をたたき激論ですけどね。それでもまあ、人間的な関係の構築に少しでも役立ったという点で、意義はあったと思っています。またイスラエルとパレスチナの問題でも、来日した代表と日本の国会議員との懇談も行われ、パレスチナ側の懇請により2023年10月7日のハマスによるテロ事件以来停止されていた国際連合パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA＝アンルア）への日本の資金援助が再開されるといった成果も得られました」

福家長吏 「イスラエルとパレスチナの紛争ですが、特にイスラム教がからむ話になると、日本人には理解しがたいことが多く出てきます。大阪・関西万博は先日、盛況のうちに終了しましたが、私はインドネシアパビリオンで開催されたSDGs（持続可能な開発目標）をテーマにした対話集會に招かれ、参加する機会を得ました。インドネシアはご承知のように、9割の国民がムスリムです。最初、議論がかみ合わないことも多かったけれど、話し合ううち日本と共通する問題もあることが分かった。日本は島国ですから、これまで世界の多様性を知る機会がそもそも少なかった。世界平和の実現を求めらるなら、まずは異国の文化や習慣、歴史を知ることから始めるのが大事と痛感させられました」

心の中に「平和の砦」築く

——宗教者が平和活動に取り組むとき、政治とどんな距離を取るのかについて悩まされます。われわれには武力衝突を抑制する現実的な力はなく、結局は「祈ることしかできないのか」と無力感にかられてしまうこともあります。

戸松理事長 「WCRPはその点、はっきりしています。私たちはあくまで宗教者であって、政治活動をめざす団体の加盟は認めていないのです。とって、祈るだけで十分とも思っておらず、まずは戦争が起きる諸原因を解決していこうと考えるのです。そのため、さまざまなタスクフォースを作り対応することにはしています。貧困解消であるとか気候変動対策とか女性差別、人身売買禁止などなどです。それぞれに専門家がいて、たとえば東日本大震災が起こった時には、震災救援のチームが現地に入って活躍しました。もちろん欠点もあるけれど、世界最大級の諸宗教のネットワークという利点は、今後も活かしてゆきたいと思っています」

福家長吏 「政治とのコミットの仕方は微妙だけれど、宗教者としての立ち位置だけはしっかりしておかないといけませんね。そのうえで、紛争当事者同士が出会えるような場所を提供すること、また現場で困っている人たちの支援することが、われわれに求められる役割ではないでしょうか。遠回りであることは分かっているし、直接、政策などに反映させられないもどかしさがあるにしても、それしかないと思っています」

——園城寺での平和活動といえば、11月3日に除幕される憲法九条顕彰碑の建立が注目されています。

福家長吏 「滋賀県九条の会や滋賀宗平協などの有志の方々から、滋賀県内には顕彰碑がないので建てたいという話をうかがい、公共用地では難しいだろうから、寺の境内ならと引き受けたのです。境内といっても拝観受付の外の境内で、立ち入り自由な場所です。そして私のほうで一つだけ注文をつけたのは、趣意書の中にユネスコ（国連教育・科学・文化機関）憲章の前文冒頭の『戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦（とりで）を築かねばならない』という文章を引用してほしい、そして正式名称も『平和といのちを

FEATURE

つなぐ碑』としてもらったことです。憲法九条顕彰という通称のみが独り歩きすると、政治的なシンボルになってしまう恐れもありますから」

——確かに、ユネスコ憲章の精神は重みがありますね。制定されたのは第二次大戦が終わった直後の1945年10月ですが、現代のわれわれが読んで深い意味を感じます。

福家長吏 「当時はソ連を中心とした共産主義が勢いを強め、日本でもマルクス主義的な唯物論が大きな影響力を持っていました。にもかかわらず、ユネスコ憲章は「戦争も平和も心の問題から起こる」と言い切った。ここには、仏教的な教えにも通じる真実があります」

——戦後80年に、この碑が建立される意味も小さくないですね。

福家長吏 「平和を求めるみなさんの気運が、そろって実現したのです。しかし一方で、問題は建ててからだと思っています。できあがったから、もう何もしなくていいではない。むしろ碑の精神を、確実に次の世代にバトンタッチすることが重要です」



除幕された「平和といのちをつなぐ碑」の前で、福家長吏(左)と廣瀬理事長

宗教者の役割は「平和の実現」

——私の好きな16世紀オランダの神学者エラスムスの言葉に、「聖職者たる者は一切の戦争に反対すべきだ。武力による紛争の解決を阻止できなくとも、決して戦争を是認したり戦争に参加したりすべきではない」(エラスムス『平和の訴え』箕輪三郎訳、岩波文庫)というものがあります。宗教

は現実の政治の前には無力に見えるが、戦争に結び付く危機には、強く「NO!」を叫ばないといけないのではないのでしょうか。

戸松理事長 「現実の世界情勢にあっては、その判断はなかなか難しい。たとえばウクライナとロシア、イスラエルとパレスチナの関係は、いかに宗教者同士であっても厳しいものです。それぞれに「正義」があり、「正義のためには、相手の命を奪っても構わない」と言い切ります。確かに、人類の長い歴史を振り返っても、戦争がなかった時代は皆無といっていいほどで、ホモサピエンスとは他を攻撃する存在だと考えざるを得ない。しかし、そうしたあり方を、少しでも制御できるのが宗教なのではないでしょうか」

——全く同感ですね。平和な世界を作り上げることこそが、宗教者の最大の存在理由と言っている。

戸松理事長 「私が宗教者のあり方として感銘を受けたのは2019年11月24日、広島のできごとでした。原爆慰霊碑に祈りを捧げたローマ教皇故フランシスコは、核兵器保有国代表らも並ぶ前で『核兵器を持つことは罪だ』と、はっきりおっしゃったのです。現実の世界情勢がどうであっても、『核兵器を保有することは倫理に反します』と断言した姿に、宗教者の理想を見た思いでした。WCRP日本委員会での私たちの活動も、微力であるかもしれないが、将来にわたって続けなくてはならないのです」

福家長吏 「それと同時に、宗教者ならではの、この本質に踏み込んだ見方も大事にしたいと考えています。具体的な話で言うと、最近のニュースで目を引くのは日本各地でクマが住宅地に出没し、少なからぬ死傷者が出ていることです。対処法はあれこれ議論されていますが、このような事態に至ったには人間の側にも一定の責任があるのだから、自然との関わりであるとか山林開発のあり方などについてしっかり議論し後始末をつけるべきだと私は考えています。われわれ宗教者も、積極的に加わっていくべき課題ではないでしょうか」

戸松理事長 「私も大賛成です。浄平協は戦前・戦中の浄土宗教団が、戦争とどう関わったかを検証する報告書(『浄土宗「戦時資料」に関する報告書』)を出されましたが、これは歴史的な事実を明らかにする、意味のある調査でし

た。退任した石破茂首相も戦後80年の所感を出し、なぜ負けると分かっていた戦争を始めたのか、みんなで問い続ける必要があると訴えた。このように、世間で起きているさまざまな出来事について、本質は何なのかと深く問いかけることが、宗教者のもう一つの役割だと思っています」

加害者と、被害者の「論理」

——戦時下資料の調査では「何をなし、何をなさなかったのか?」という重い問いかけが、私たちにも残りました。われわれ宗教者が、政治の危険な流れに二度と組み込まれないためには、どういった心構えが必要となるのでしょうか。

戸松理事長 「私の父も戦争に行った世代で、その話になると『家族と国を守るための戦争だった』という父と、論争になってしまいました。私はそうした事態に陥らないよう、仏教者として五戒、とりわけ『殺すなかれ』という不殺生戒にこだわります。WCRP日本委員会の理事長職を引き受けるにあたって、さまざまに思い悩み、万が一他国に攻められるような事態になれば、自分はたとえ周囲から非国民と非難されようとも降伏する、戦わないと決めました。そういう人間がいてもいい。宗教者の役割は、場合によっては非合理的な考えを大事にすることから」

福家長吏 「実に難しい問題ですね。実際にそのとき、思ったような行動が取れるかどうか、私には分かりません。ただ、そうした事態に陥る前の水際で止めなければと思います。しかし日本はぬるま湯の社会ですから、危機感を持てるかどうか…。そうした状況に至らないよう、宗教者が力を注ぐべきなのは、世界の人たちと積極的に交流して仲間をつくり、友人をつくることだと思っています」

——その点では、興味深い話があります。私の父は戦前、浄土宗の開教使として中国に赴任しました。本人がどのように自覚していたかは不明ですが、当時の国策であった対支宣撫工作の一端を担っていたことは確かです。上海でラジオ放送の蘇州語講座を担当したり、幼稚園の園長として活動したりしていたのですが、そこに通っていた中国人のお孫さんが戦後、龍谷大学に留学することになり、かつての縁を頼って大津の私の寺に下宿したのです。彼とはその後も兄弟のような付き合いが続いているのですが、国家間の関係とは無縁の家族のような人間的結びつきができました。



福家長吏 「私もキーウ国立建設建築大学の教授で、戦火の下でウクライナの木造教会の保存に尽力されているガリーナ・シェフツォバさんと出会い、彼女の写真展を開催するという不思議な縁ができました。寺は政治的な中立地帯、サンクチュアリ（聖域）というのでしょうか、もともとそうした性格があると思います」

戸松理事長 「世界の人々と交流してゆく時、相手の立場に配慮することが大切だと思います。たとえば日本人は8月6日、9日を『ヒロシマ、ナガサキの被爆の日』と記憶し続けています。ところが、アメリカ人にとっては、12月8日の『リメンバー・パールハーバー（真珠湾を忘れるな）』なのです。日本の敗戦は相手の勝利、お祝いの日なのです。被害者側の論理と加害者側の論理は、まったく違うということをきちんと理解したうえで、平和を築くために世界と協力していくことが重要なですね」

——平和を実現する道は簡単ではありませんが、われわれの願いが若い世代にも引き継がれることを信じて、地道に、そして確かな「実践」を続けていくことが結論でしょうか。本日は長時間にわたって、どうもありがとうございました。

鼎談開催日：2025(令和7)年10月16日
ところ：浄土宗宗務庁(京都)

浄土宗平和協会 第7回作文コンクール受賞者の報告



浄土宗の宗立宗門高校の17校の生徒さんを対象とした令和7年度第7回の平和作文コンクールは、樹徳高等学校55名、真和高等学校52名、東山高等学校24名、上宮高等学校23名、上宮太子高等学校6名、京都文教高等学校1名で延べ161名の生徒さんから応募をいただきました。勉学にクラブ活動等々で忙しい中をそれぞれの平和に対する思いを綴っていただき誠にありがとうございました。

161名いずれも素晴らしい作文でありましたが、平和作文コンクール審査会におきまして特に優秀な方5名と1校を下記のとおり選出させていただきましたのでご報告いたします。

記

《各賞及び受賞者》

総裁賞	東山高等学校1年生	高村淳宏
副総裁賞	樹徳高等学校2年生	荒木千鶴
副総裁賞	真和高等学校2年生	田中 藍
会長賞	上宮高等学校3年生	米本知紗
理事長賞	上宮高等学校3年生	久下莉央
学校賞(総裁名)	真和高等学校	

以下、総裁賞授賞式におけるインタビューから一部抜粋

伊藤委員長：この度の作文コンクール総裁賞おめでとうございます。今回の作文の内容を読ませていただいて、数多い中から、すぐに目をひくような素晴らしい内容だったと思います。「戦争での死に向き合う」というタイトルについては、いつくらいに?どのように考えてくれましたか?

高村さん：そうですね。最初一回、担任の先生からコンクールがありますよとお知らせいただいて、まず下書きを、題名を決めずに書いて、そこから全体を見て題名を決めました。

伊藤委員長：「一人殺せば悪人で、百万人殺せば英雄だ。数が殺人を神聖にする。」とインパクトのある引用があります。チャップリンの映画から引用してくれている部分がすごく印象的だったのですが、このチャップリンの映画は実際に見たとか?どこで知ることになったのですか?

高村さん：チャップリンの映画は見えてないのですが、僕がけっこう好きな推理小説で出てきた言葉で、それを読んだ時にそうだなあと、今回のお題を聞いたときに、あっ、これだと、これを引用するべきと思い選びました。

伊藤委員長：どれくらいの時に出会った言葉ですか?

高村さん：中学一年生くらいの時だったと思います。

伊藤委員長：戦争というのは高村さんにとってのイメージ?どういう意味がありますか?

高村さん：やっぱり怖いと思いました。日常生活を生きていて、やっぱり人の命が人によって奪われるっていうのはよくありますし、新聞とかニュースでもよく見ますけれども、そういう一つ一つの事件というのは、誰が被害者で誰が加害者で疑われているとか、詳細なことがわかって、それを聞いただけでも怖いと思うのですが、ひとつの場所で、一つ一つ報道される事実がいっしょに出てくるというのは、通常考えられないですし、そこはすごくショッキングなものだと思います。

伊藤委員長：身の回りで戦争のこととかを話してくれる人はおられますか?

高村さん：自分の祖父母は、戦後生まれなので直接的に聞くことはないのですが、よく新聞を読むので、新聞に書いてある戦争体験みたいなものはけっこう読んでおります。

伊藤委員長：本文中の「反戦の動機を戦争体験そのものに依拠し続けるだけでは、持続性は担保されない。」この部分にも興味をもったのですが、持続性というのは一言でいえばどういうふうなところで表現される用語ですか?

高村さん：お題が戦後80年の平和について考えましようというところで、やはり日本は戦後80年間何も戦争に参加してこなかったけれども、その間にもいろんな国々でおきておりますし、いま現在も続いているもので、じゃあ戦争で負けたという記憶、その悲惨な記憶、本当にいろんな人が亡くなって悲しいですねという記憶が重要ではありますが、そこからもう

一步踏み出して、何が戦争のダメなところなのかというところを深く考える必要があるのかなあと、どの場所でも、どんな時代でも当てはまり得る反戦の理由みたいなものが重要なのではないかと僕は思いました。

伊藤委員長：本題から離れますが、学校生活はどんな感じですか?楽しく毎日過ごしておられますか?

高村さん：けっこう楽しく過ごしております。

伊藤委員長：宗教の授業もあると思いますが、宗教の時間とか、法然上人の教えとか、中学校から習ってきてどのように感じるのでしょうか?戦争に絡めても絡めなくてもいいです。

高村さん：他の宗教の性質みたいなものも宗教の授業で扱っていただくのですが、やはり浄土宗は、他の宗教と比べて死と向き合う部分は大きいと思います。極楽浄土にいくためにという部分が大きいので、現世利益というよりはそっこのほうに重きをおいているようなところがあると思うので、今回作文を書くときにも宗教の授業で習ったことを思い返して、不殺生戒とか習ったなというところはいろいろとありました。

伊藤委員長：学校教育の中でもこういう部分が活かされてきたということ、宗門校としても価値のあることだと思います。将来は、何に向けて進みたいとかありますか?

高村さん：仕事はまだ考えてないですけど、大学に行って学びたいことは、まだぼんやりとしてますが、新聞とか読むなかで、組織、国の体制みたいなものがどの国も違って、でも共通している部分もあって、大統領制であったり、議院内閣制であったりとか、そういう部分の細かい違いみたいなものはけっこう興味があるので、政治体制みたいなところを勉強したいと思っています。

伊藤委員長：やはりそういうことに関心をもっておられるんですね。また本文に戻っていきますが、平和というのは、どういうことだと思いますか?

高村さん：いろいろと平和に関する本とかもいっぱい出版されているのを読んで、戦争がない状態だけではなくて、戦争の理由になるようなものがなくて、みんなが幸せに生きている状態が平和ですよよく聞きますけれども、まずは戦争がない状態が平和じゃないのかと思います。更にいえば、人が人によって殺されない状態が世界に広くもたらされることが平和といえるものかと思います。

伊藤委員長：正にそのとおりだと思います。平和とは戦争、人を殺すということが慣れるとか、あるいは、多くの人を殺すことが正当化とされるという考え方、これは人間どの人間にも可能性としてあることであると思うのですが、どういう形で私たちが阻止していくかという部分は、これからいるんなところで考えていただくこととなります。政治の勉強する中でも人間のマイナスの部分をどういう形で私たちが取り組んでいくかという部分が大切だと思います。

戦争での「死」と向き合う

東山高等学校一年 高村 淳宏

殺人は罪だ。

当然のことである。これを否定する人はまずいないはずだ。自分や大切な人の命を奪われたくない。その純粋な思いが、この倫理を普遍的なものにしている。

第二次世界大戦の終結から八十年。記憶の風化で平和が揺らぐのではないかと懸念する声もある。だが、時が流れれば当然記憶は薄れる。反戦の動機を戦争体験そのものに依拠し続けるだけでは、持続性は担保されない。つまり、戦争を拒否する動機はどの国にもどの時代にも通用する普遍的なものではない。

それこそ「殺人は罪だ」という確信である。誰が何と言いつい換えようと、戦争とは政府が公認した組織的な殺人であり人の命が国家や集団によって消費されることである。戦争を肯定するとは、すなわち殺人を肯定することだ。ここにチャップリンの映画「殺人狂時代」の有名な台詞を引用しよう。

「一人殺せば悪人で、百万人殺せば英雄だ。数が殺人を神聖にする。」

不謹慎な表現かもしれない。だがこれが現実である。平時に殺人事件が起きれば一人の犠牲者のために多くの人が悲しみ、加害者を憎む。しかし戦争という名のもとで政府が公認

した殺人となれば、人々は犠牲者の「数」だけみて曖昧な悲しみを表明したり「仕方なかった」などと言う。大量殺人さえ否定できないのに、どうして平時の殺人を非難できようか。八月、戦争に従軍して亡くなった人を賛美する投稿が、私のよく使うSNSでも増えたように思う。中にはこんな投稿もあった。

「彼らの犠牲があったからこそ、いまの日本は平和なのだ。」

しばしば、「意味のある死」という言葉が使われる。戦後の社会は想像しがたい悲嘆の中で、戦時中の死に意味を見出そうとした。従軍した人のことを悪く言いたくないという心理も当然あっただろう。しかし、意味のある死など存在しない。戦争がなければ続いたはずの日常があったのだ。それを断つに正当な理由など、ない。勿論、この指摘が人によっては冷酷だと受けとめられることは承知している。しかし私はこれこそが死者への誠実さなのだ。確信している。反戦は理想主義ではない。現実を直視する考え方なのだ。

悲劇を悲劇として、ありのままに認められる。戦後八十年とはそのために要した時間であるべきだ。私は今、十五歳。十年後、私は二十五歳で、戦後九十年の年でもある。

戦争での「死」と真摯に向き合うこと。私はそれが戦後八十年から九十年の間に青年期を生きる者の責任だと痛感する。そして二度と悲劇を繰り返さないために「殺人は罪だ」という単純な原理と向き合い続ける。

「戦災供養とともに思う心」

北海道第二教区大成寺 藤井 敬亮 師



広島、長崎に原爆投下される少し前、日本全体が空爆の標的となっていました。北海道の片田舎である釧路市は明治30年代降、内陸に硫黄、海岸に石炭と戦争資源を供給する軍事港として発展してきた街です。ここに開拓初期の明治15年に開教にやってきた僧侶が浄土宗仮説教所を建て「無量山大成寺」となりました。私で8代目となる歴史の浅い寺院ですが、本尊前に御前仏として座す大阿弥陀仏像があります。6世正亮上人の発願で造立されました。釧路空襲という戦禍を伝える仏像です。戦後の新聞記事には6世の仏像造立に至る動機がこのように記されています。

『昭和20年7月14日、2度にわたるグラマン機の来襲で、釧路のマチは猛火につつまれた。死者177人、防空壕の中から、焼け跡から死体が運び出されたのは一昼夜すぎて翌15日のこと。藤井住職のもとに市役所から電話がかかって来た。その日の午後である。「死者の供養をしてほしい。各寺に連絡したが、残っている住職は藤井さんだけ」みんな招集で軍隊に行っていた。藤井住職は19年招集、当時復員していた。鉄カブトをかぶり、指定の釧路公会堂前へかけつける。そこには20体ばかりだろうか、亡き骸が山になっていた。腕、足だけのもの、目が飛び出したもの。むしろはかけてあったが、それらの顔は皆苦痛にゆがんでいた。棺桶などあるわけがない、死体は紫雲台墓地までトラックで運び、穴を掘って埋めるという…。』

6世はこの体験を形に残すため空襲の中心地である児童公園に仏像の建立を計画し市に上申、以降7年間、7月14日に法要を執り

行いました。後に仏教会に働きかけ、戦災遺族会の主催で13回忌までは各宗持ち回りで寺院にて勤められたが、遺族会中心者の転出や逝去に伴い立ち消えになったそうです。その間も市に足を運び仏像建立の交渉をしていたが、公園の一部を宗教団体に貸すことはできないと断られました。そこで平和祈願のために大成寺に大阿弥陀仏像の造立を発願し、17回忌にあたる昭和36年にあわせて、入魂の法要をひらきました。

戦時は国民の誰もが富国強兵のもとに半ば強制的に戦勝礼讃しなければなりません。当寺には5世住職の鉄供出記事や曾祖母の国防婦人会用品、6世出征時の日章旗や6世自身が演じていた戦機高揚のための紙芝居など、争いを心ならずも煽ってきた負の遺産が残っています。戦時の行いを後の者が責め、悪人にするのは簡単ですが、近い身内までもが行わざるを得なかったその異常な世相を汲み取り理解しなければなりません。祖父である6世は戦時の事はあまり話しませんでした。戦後の大阿弥陀仏像造立は戦没者供養だけではなく自身が戦争に加担せざるを得なかった懺悔の気持ちも多分に込めたものであると思います。

開眼法要は増上寺第87世椎尾辨匡大僧正台下を迎えて執り行われました。この法要にて当事者である諸上人が懺悔偈、十念と称えた心境を慮ると、平和協会が浄土宗として全国的に旗を振って世界平和を未来に願う活動の大切さと有難さに気付かされます。

民衆に寄り添う「だん王さん」の寺院活動

京都教区檀王法林寺 信ヶ原 雅文 師



京都の東に位置する檀王法林寺は、西に鴨川のせせらぎを聞き、北と東には山々を望み、南には三条通を行き交う人々の活力を、今も昔も感じる場所に門を構えています。

また、寺内にあっては、「梅檀香木の法の林に入るものは、悉く芳香に薫じられて道心者となり、菩提の種を成就する」という寺名の由来となった梅檀の樹木が生い茂っています。街の中にありながら、自然豊かな境内に、今日も子どもたちの明るく賑やかな遊び声が溢れ、有縁無縁の人々の参拝が絶えないお寺となっています。

檀王法林寺は、絶えず民衆の思いに心を寄せ、民衆のための仏教であること、民衆のためのお寺でなければならないこととした宗祖法然上人及び開山袋中上人の教えが、寺院運営の「礎」となっています。

江戸時代の初め、自らの御前に顕れた「主夜神尊」の御加護を得て渡琉した袋中上人の布教活動は、民衆及び琉球國尚寧王に篤く受け入れられました。時に、薩摩藩の強硬な要求に苦慮されていた尚寧王に平和的外交を指南された後、帰京され当山を開基されたのです。

第2代團王上人は、師僧袋中上人が称える「民衆に寄り添う仏教」をさらに広められ、当寺院は通称「だんのうさん」と民衆に親しみを込めて呼ばれるようになりました。

現在、6月23日沖縄慰霊の日に合わせて、沖縄戦の戦没者を追悼する法要を勤め、沖縄の三線島唄、琉球舞踊を演目とした「沖縄ピースフルコンサート」を催しています。

また、8月6日には、京都宗教者平和協議会、京都仏教徒会議、京滋キリスト者平和の会、京都原水爆被災者懇談会、檀王法林寺が共催となり、「京都平和の集い」を開催しています。戦後80年の今年は、原爆犠牲者、世界の戦争犠牲者の追悼法要後、講師として、元NHK アナウンサーの杉浦圭子さんを広島よりお招きして、「被爆体験や平和の思いを受け継ぐ家族伝承講話」と題して、お話を伺いました。

その後、第2部の「子どもに伝える平和の集い」では、当保育園年長組園児30名、当児童館来館の学童30名、合計約60数名の子どもたちに、「平和の大切さ、命の尊さ」について、杉浦氏からお話を頂き、杉浦氏がナレーターを務められたアニメーション映画「夏服の少女たち」を上映しました。

こうした活動を続けること、特に次代を担う子供たちに「平和の大切さ、命の尊さ」を訴えること、この思いを大切にできる人に育てることは、今の大人たちの大きな使命、責務であると考えています。

浄土宗平和協会の会員が、さらに増えますことを祈念しています。

合掌

令和6年度平和念仏募金献金者名簿

(令和6年4月1日～令和7年3月31日順不同・敬称略・重複は2回納入者)

【北海道第一教区】

函松 極楽寺 田村 紀 晃

【北海道第二教区】

東 大然寺 大 高 有 光
東 正福寺 大 高 陽 照

【青森教区】

弘南 貞昌寺 赤 平 明 導

【岩手教区】

花巻 廣隆寺 谷 地 玄 光

【山形教区】

山形 迎接寺 江 目 芳 隆
下北 安養寺 伊 藤 知 雄
鶴岡 常念寺 渡 辺 剛 紀

【宮城教区】

第三 雲上寺 東 海 林 良 昌

【福島教区】

中央 大千寺 畑 善 徳

【栃木教区】

下都賀 福正寺 松 濤 淳 一
晃北 龍蔵寺 木 村 智 士
塩那 法真寺 本 多 元 照

【茨城教区】

常総 本願寺 本 多 俊 実
常総 浄圓寺 横 島 信 雄

【東京教区】

芝 安蓮社 福 原 秀 美
城西 西念寺 西 嶋 晃 健
城西 長安寺 石 川 隆 信
豊島 十方寺 坂 田 良 仁
浅草 権 寺 日 比 野 郁 皓
浅草 権 寺 日 比 野 郁 皓
北部 保元寺 里 見 達 人
北部 長建寺 後 藤 了 寛
北部 光増寺 栗 原 慎 雄
城北 浄心寺 榎 本 雄 心
北部 西光寺 笠 原 立 樹

【千葉教区】

安房 浄閑寺 比 企 隆 夫
中 村 貢 祐

【神奈川教区】

中郡 大宝寺 佐 々 木 元 洋

【長野教区】

更埴 光林寺 西 澤 清 文
諏訪 法光寺 小 口 秀 孝

【静岡教区】

東駿 林昌寺 小 島 亨 臣
西遠 法光院 黒 澤 龍 司

【三河教区】

豊川 大善寺 立 松 真 我

【滋賀教区】

神崎 陽泉院 椿 随 宏
神崎 正福寺 関 正 見
蒲生第三 巖浄寺 深 尾 般 國
野洲 浄勝寺 安 藤 正 雄
野洲 常念寺 南 尊 融
甲賀 溪蓮寺 加 藤 善 明
甲賀 清光寺 三 田 宏 壽
湖南 善福寺 浅 野 誓 光
大津 安養寺 井 野 友 芳

【京都教区】

京極 道知院 市 川 芳 徹
伏見 大信寺 宮 田 典 彦
伏見 大善寺 羽 田 龍 也
洛南 常念寺 本 多 廣 賢
相楽 十輪寺 眞 鍋 博 鵬
南城 常楽寺 江 島 慈 心

【和歌山教区】

加有 地藏寺 佐 原 正 哲
日高 光明寺 垣 光 隆
日高 高泉寺 木 村 道 夫
西牟婁 本覺寺 山 岡 龍 史
西牟婁 本覺寺 山 岡 龍 史

【大阪教区】

生玉 光聖寺 秋 田 光 哉
西清堀 天性寺 萱 野 克 實
北摂 慧光院 山 北 光 彦
堺 辨順寺 岸 田 勲 英
泉北 心福寺 山 内
泉大津市浄土宗寺院年末托鉢奉仕団
泉南 勝楽寺 前 原 英 彦

【兵庫教区】

摂陽東 法輪寺 北 村 隆 彦
三木 光照寺 市 野 正 善
播磨西 浄運寺 大 林 敬 明

【鳥取教区】

伯耆 専称寺 山 本 尚 三

【岡山教区】

総社 真福寺 亀 山 敬 三

【広島教区】

西部 妙慶院 加 用 雅 信

【南海教区】

高知 浄土寺 渡 邊 正 央

【福岡教区】

粕屋 西念寺 梶 原 俊 孝
福岡 圓應寺 三 木 英 信
福岡 成道寺 佐 藤 隆 昭
福岡 一心寺 永 江 憲 祐

【佐賀教区】

西部 専称寺 川 副 春 海

【長崎教区】

長崎 法泉寺 小 田 憲 司
平戸 長徳寺 日 下 部 匡 信
五島 浄福寺 青 柳 浄 隆
五島 西方寺 原 口 俊 哲

【熊本教区】

第二 大信寺 山 本 幸 典
第三 圓性寺 石 原 史 博

【三州教区】

宮崎 三福寺 田 村 智 英

【賛助会員】

東京 個人 比 企 隆 夫

この度は多大なるご寄附を頂戴しましたこと、感謝申し上げます。

お陰様で総額 824,228 円 (79 件) を集めることができました。

これもひとえに皆様方のご協力の賜物であります。

今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

本来なら参上すべきではありますが、略儀ながら書中をもちまして御礼申し上げます。

令和6年度 会費納入者ご芳名 (「教区」「組」「寺院名」「個人名」 ※敬称略)

【北海道第一教区】

中央 教立寺 宗川啓農
室蘭 善照寺 松尾昭男
小樽 無量寿寺 佐々木昌宏

【北海道第二教区】

東 大成寺 藤井敬亮
大然寺 大高有徳 史照憲
浄土福隆寺 正高昭祐
正法隆寺 大石高木
菩提寺 若木祐之

【青森地区】

弘南 昌寺 赤平法導
東青 浄満寺 長尾拓 應永義
上北 平安寺 葛西成

【岩手教区】

花巻 廣隆寺 谷地玄光
松岩寺 善明寺 鬼水俊英
浄願寺 願寺 林英

【山形教区】

山形 專念寺 佐藤康正
迎光寺 秋目宏 樹司
浄養寺 伊藤知 成剛
常念寺 渡辺 成
常願寺 本三 井諦

【宮城教区】

第二 成覚寺 中村真 英貴
愚鈍院 中村誠 瑞治
常念寺 石村林 賢昌
雲上寺 高橋賢 道明
稱本寺 賀部清 瑞康
往生寺 奥豊嶋 俊

【福島教区】

中央 大無寺 畑善徳 徳翔
無能寺 赤柳明 良憲
無誓傳寺 日藤伴 美裕
西常念寺 大塔徳 一彰
宣照寺 蓮齋藤 賢修
光明寺 斎藤裕 慈

【群馬教区】

高崎 大泉寺 早瀬裕 昭澄
吾妻 清見寺 長田正 年爾
沼田 正円寺 木澤村 現秀
前橋 正幸院 幸晴院 恵博
雲念寺 長念寺 稲宮本 美江
神光寺 神光寺

【栃木教区】

足利 法玄寺 和田幸 信浩
徳正寺 向寺 好章 佳
近龍寺 龍寺 松今 淳一
福雲寺 龍寺 高聲寺 巖蔵寺 龍蔵寺 大延寺 法善寺 万福寺

【茨城教区】

水戸 清巖寺 上田成 典憲
霞北 照光寺 吉水幸 光浩
常総 得生寺 長谷川 一俊
本願寺 本願寺 松本 多島 信正
浄圓寺 浄圓寺 横小 田中 勝
無量寿寺 宝輪寺 田中 勝道

【埼玉教区】

第一 蓮馨寺 桑原久
第二 西願寺 丹羽恒 昭孝
第三 浄林寺 清水里 義智 博
第四 圓福寺 中川端 清光 臣
聖安寺 池田井 常隆 之

【東京教区】

芝 大眼院 小村林 道一
最勝院 小福林 洋正
妙蓮社 小渡邊 秀美
安願寺 西布嶋 裕章
念寺 西渡村 晃伸
西岸寺 清土邊 眞弘
浄梅寺 善光島 名川
善安心 長石 佐藤
瑞方寺 十野 呂瀨
功徳院 浄光水 木野
敵浄院 一行寺 院院
一善光 松攝 靈大 明
善長 攝大 明神 法

城南

城西

豊島

江東

浅草

城北

北部

八王子

教務所直轄

【千葉教区】

安房 浄蓮寺 郡嶋 威宣
葛飾 南龍寺 藤田 泰良
【神奈川教区】 壽福寺 伊林 壽徳
慶岸寺 林宮 康順
三大宝院 光寺 田口 宏
見光寺 安善寺 林田 成
龍安寺 善忠寺 石見 弘
宗善寺 光傳寺 夏島 貴
大寶寺 誓願寺 佐木 洋

港北

鎌倉

中部

小田原

小田原 城源寺 古林哲 茂
春光院 石川川 邦雄

【山梨教区】

甲府 善光寺 吉原水 優人
来迎寺 清水隆 善善

【新潟教区】

高田 大仙寺 石川満 祐
長岡 照専寺 川端和 憲
川上 大照願 佐藤圭 輔

【富山教区】

水波 大念寺 小倉林 照人
新川 念傳寺 井正 則

【長野教区】

法學寺 古田幸 隆
三光林寺 伊東澤 靖
芳泉念寺 西金積 明
玄向寺 若麻績 実
宗林光寺 法安山 須眞
柏心通寺 念光平 徹
浄専玄 光浄 賢

更埴

上小

松本

諏訪

伊那

【静岡地区】

北豆 願成寺 魚尾和 瑛
東駿 林昌寺 水島亨 臣
清水 西方寺 小水口 海
静岡 法相寺 堀田 義
寶華院 円光院 田井 卓
宝台圓造 道心造 上輪 哲
道心造 善長 邦秀

【三河教区】

豊橋 普仙寺 加藤良 光
豊川 善善寺 立水谷 真浩 志
豊田 大法寺 水谷 水

【尾張教区】

名古屋 傳光院 吉村教 行
建中寺 阿彌陀寺 坂魚住 真
善光寺 西谷 善 彦
西雲谷寺 雲谷 深 彦
深田 中 山 大 容

【伊勢教区】

津 天然寺 中山大 容

【伊賀教区】

上野 念佛寺 豊岡 瞭 尔

【岐阜教区】

赤坂 如来寺 本多 岳 明

【石川教区】

浅野川 玄門寺 浅井大 雄
能登 西光寺 高僧 英 淳

【福井教区】

坂井 西光寺 大田珠 光
敦賀東 西蓮寺 花木 信 徹

【滋賀教区】

湖北 宗安寺 竹内真 道
住泉寺 滝川亮 亮 介
浄国寺 専修院 長山 文
専来迎寺 陽泉寺 橋本 定
吉祥院 大聖寺 秦久丸 昭 宏
雲迎寺 西光寺 福稱蓮 文
光明寺 名光寺 蓮生寺 志 則
福泉寺 光生寺 東光浄 久 永 浅 道
福蓮生寺 光浄 藤山 井 英
東光浄 水 深 本 吉 一
深 尾 本 吉 信
尾 般 秀 順
般 秀 宏 教
國 般 秀 國

愛知

神崎

蒲生第一

蒲生第二

蒲生第三

兵戈無用

浄土宗平和協会理事 廣瀬 卓爾

「戦後80年」。令和7年(2025)は、この言葉が論壇をはじめ各種のメディアで多用され、いつになくその意義に関する論議も活発であった。令和6年に日本被団協がノーベル平和賞を受賞したこともあり、核兵器廃絶を求める声は一段と増した。このように、平和の尊さと非戦を訴える思潮の高まりが見られはしたが、8月15日が過ぎ初秋を迎える頃になって、この流れが低調になっているように私は感じている。むしろ政権は非核三原則の見直しを公言して憚らず、武器輸出の目的を「救難・輸送・警戒・監視・掃海」の五つに限定する「防衛装備移転三原則の5類型」をも撤廃する方針を発表するなど、潮流は激しく逆流している。

昨夏、日本被団協の事務所を訪ねた折、協会代表の田中熙巳さんにお会いした。その時、呟くようにおっしゃった次の言葉が今も脳裏を離れない。「廣瀬さん、ノーベル平和賞を授与されたのは幸いだったが、受賞

を契機に、我々の活動に寄せる人々の想いの熱量が低下するのではないかと心配しています。戦後80年ということもあって、今年は、平和に対する機運の盛り上がりは確かに例年以上ですが、冷めやすいですからね、日本人は。何としても気運の風化は避けねばなりません。」

令和8年(2026年)は戦後81年目の年である。18年前に浄土宗が発した【平和アピール】を読み返す。そこには、「非戦・非核武装を誓い、それに向けて行動することを宣言する」と高らかに表明している。表明したからには、その着実な実践が求められることは言を俟たない。顧みるに、この18年間、私たち浄土宗教師は、非戦・非核武装にどれほどの意を用いて力を注ぎ、実践したであろうか?志を同じくする本宗教師の諸師と共に、さらなる努力を傾注し精進したい。

【第5回浄土宗平和誓願の集い】

《北海道地区大会》

- ◇日時 令和8年6月25日(水)14時30分
- ◇場所 北海道第二教区 新善光寺(札幌)
- ◇内容 会員総会
平和誓願法要
戦時資料解説
記念講演



第4回九州地区大会の様

編集後記

2025年度の宗門高校から寄せられた作文コンクールの応募の殆んどが例年の限られた高校のみであったことは残念である。しかしながら、総裁賞を受賞した東山高校1年生の高村淳宏君は、この凄じい現代社会において、戦争での「死」と真正面から対峙している。美事な作品だと思う。

生徒たちは、過去の日本の過ちを各種の資料と語り部からしか情報を得ていないため、平和の取組みの方便を知らない。彼らが作文を書く機会を得て、これから成人し社会に出たとき、それらを伝承していくことが大切だと口をそろえて言う。

今から14年前に亡くなった『はだしのゲン』の原作者・中沢啓治の墓石には次の言葉が刻まれている。「人類にとって最高の宝は平和です。」(山川正道)

入会要項

浄土宗平和協会の活動にあなたも参加しませんか?

正会員

対象…浄土宗教師・寺族
会員…年間10,000円

賛助会員

対象…檀信徒、企業や宗教法人以外の団体
会員…檀信徒会員年間2,000円
法人会員年間10,000円(一口)

浄土宗平和協会役員・スタッフ

総裁	伊藤 唯真	参 与	荻野 順雄
副総裁	小澤 憲珠	理 事 長	廣瀬 卓爾
副総裁	福原 隆善	副理事長	永江 憲昭
会 長	川中 光教		
副会長	茂木 恵順		
理 事	東海林 良昌	事務局 長	山川 正道
理 事	日比野 郁皓	事務局 次長	宮田 典彦
理 事	小口 秀孝	事務局 員	小泉 範幸
理 事	秦 智宏	事務局 員	田中 堅信
理 事	若山 敦子	事務局 員	椿 随 宏
理 事	山川 正道	事務局 員	真鍋 博鵬
理 事	加用 雅信	事務局 員	霜村 真康
監 事	山下 裕通		
監 事	倉井 正則		

寺院で回覧してお読みください。

浄土宗平和協会 Jodo Shu Peace Association



編集・発行：浄土宗平和協会事務センター
〒622-0003 京都府南丹市園部町新町火打谷5 教傳寺内
TEL: 0771-62-0442 FAX: 0771-62-1620

